

8th Aug 1988.

西日本新聞

混とんの中に熱気 日韓現代美術展

展覧会

日韓現代美術展(第6回日展。韓国側はオリジン絵画協 韓現代絵画展・第5回日韓現代彫刻展) 10日まで、福岡 市中央区大濠公園、福岡市美術館。無料。

一九八〇年に福岡市美術館で開いた第一回アジア現代美術展を契機に生まれた両国の抽象美術家たちによる交流展。韓国側はオリジン絵画協会と韓国現代彫刻会、日本側はこの展覧会のために九州の作家で構成した環抽象絵画協会と現代彫刻家集団の計百二十七人が参加する規模の大きい展覧会に成長した。全体的に見れば、両国ともに作風はさまざまで、特に彫刻は両国の作品を混在して展示しているので雑然とした感じを免れないが、新しい方向を探る姿勢の作品がかなりあって、熱気のある展覧会。

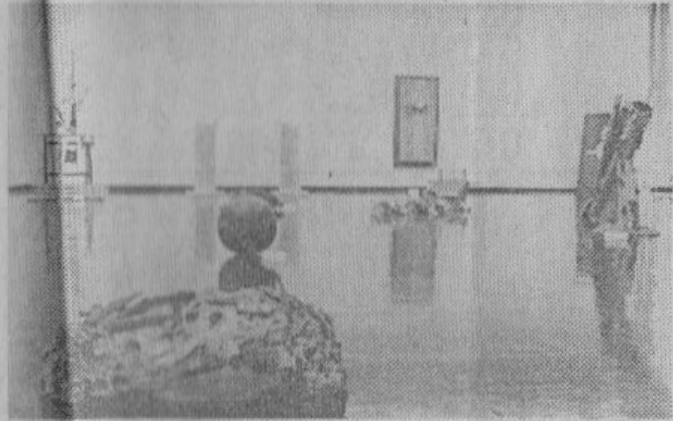
絵画では韓国作家のバラエティーの豊かさが目につく。李斗植ら幹部クラスの白を基調にした密度の濃い冷たい抽象が依然健在な一方、原色を駆使したニューペインティングがある。また、キャンバス以外に板、竹、布、紙などを素材にした立体的な作品が増えてきて、新しい世界を探ろうとしている。紙の原料をさまざまな方法でプレスして凹凸を作り、七〇年代のエコール・ド・ソウルに通じる民族色の強い静かな作品が出てきた。

日本側では、ベテランが多いこともあって、全般に静謐(ひつ)な画面を目指す作家が多く、山内重太郎、石橋泰幸、加呂昌太郎などが独自の質感作りに取り組んでいる。ほかに、立体性のある酒井忠臣や今泉憲治、版画の小川幸一、片山武などが出品。

彫刻は一層の多様性が感じられる。朴石元の花こう岩を用いた二本の石によるモニュメントはエコール・ド・ソウルを思わせるし、崔昇鎬は木材に板や鉄板をコラージュしてニューペインティング風の色彩をかけてエネルギーを感じさせる。近年の抽象彫刻では工場の設備や技術がものを言うが、その面では、安川民畝、中西久吉など日本のベテランの完成度が目立つ。しかし、荒削りながら迫力のある韓国の若手に学ぶ点も多いようだ。

日本の若手では、原始的な民力強さを持つ母里聖徳や三角錘の金属の組み合わせで洗練された美を作った中西秀明、板にエンピツでドローイングし、エンピツを走らせる方向の相違で立体性を作ろうとする広末勝巳など。

現代韓日美術展 熱気の中に混とん



第5回日韓現代彫刻展の作品

い展覧会に成長した。全体的に見れば、両国ともに作風はさまざまで、特に彫刻は両国の作品を混在して展示しているのが雑然とした感じを免れないが、新しい方向を探る姿勢の作品がかなりあって、熱気のある展覧会。

絵画では韓国作家のパラエティの豊かさが目につく。李斗植ら幹部クラスの、白を基調にした密度の濃い冷たい抽象が依然健在な一方、原色を駆使したニューペインティングがある。また、キャンバス以外に板、竹、布、紙などを素材にした立体的な作品が増えてきて、新しい世界を探るうとしている。紙の原料をさまざまな方法でプレスして

質感作りに取り組んでいる。ほかに、立体性のある酒井忠臣や今泉憲治、版画の小川幸一、片山武などが出品。

彫刻は一層の多様性が感じられる。朴石元の花こう岩を用いた二本の石によるモノメントはエコール・ド・ソウルを思わせるし、崔昇鎬は木材に板や鉄板をコラーージュしてニューペインティング風の色彩をかけてエネルギーを感じさせる。近年の抽象彫刻では工場の設備や技術がものを言うが、その面では、安川民ス以外に板、竹、布、紙などを素材にした立体的な作品が増えてきて、新しい世界を探るうとしている。紙の原料を韓国若手に学ぶ点も多いよう

展覧会

日韓現代美術展（第6回日韓現代絵画展・第5回日韓現代彫刻展） 10日まで、福岡市中央区大濠公園、福岡市美術館。無料。

で開いた第一回アジア現代美術展を契機に生まれた両国の抽象美術家たちによる交流展。韓国側はオリジン絵画協会と韓国現代彫刻会、日本側はこの展覧会のために九州の作家で構成した環抽象絵画協会と現代彫刻家集団の計百二十七人が参加する規模の大き

さな展覧会。日本側では、ベテランが多いいこともあって、全般に静謐（ひつ）な画面を目指す作家が多く、山内重太郎、石橋泰幸、加呂昌太郎などが独自の

（吉田）